

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第108号（2015年5月）

風に吹かれて（86）

白井啓治

『鄙の里山に九重の春風吹けど先の見えず』

今月号で当会報も満九年となった。三、五、七、九の節目に拘りを持つ小生であるが、九年の達成に九重の祝いと言う気分には程遠い。六月号からは足掛けの十年に入るが先を思うと些か気が重くなる。

ふるさとルネサンスの会に始まり、途中現在のふるさと風の会に改称しての満九才である。ふるさとルネサンスの会としての発足時は六名であった。第2号から伊藤さんが入会。その後「ふるさと風の会」に名称を変更し、その時に二名の退会があった。そして19号から菅原さんが、79号から木村さんの入会で、現在、発足時に一名増えて七名の会員で運営している。

もう少し会員を増やしたいのであるが、毎月文章で自分の思いを綴ったり、歴史・文化にスポットあてたふる里ヨイシヨについての考えを述べていくことに腰が引けるわけではないだろうが足踏み状態を続けている。

表現の自由の下にそれぞれが勝手な事を書き続けているのであるが、内容はともかくとして当会の自慢は、休まず毎月書き続けてきたことである。

入会以後、誰一人休みのないことは大いに自慢しているだろうかと思っている。

風と感ぜられるかどうかは別にして、空気の移動としての風は止まることはない。その意味では、風の名称に恥じない会報であると自画自賛している。

2003年に、打田昇三兄と知り合った事を切っ掛けにして「ふるさと風」を発行するに至ったのであるが、同じその年に兼平智恵子さんとも言葉を交わすことはなかったのが知り合っていた事は不思議な縁であったのだろう。

そして二人の風の流れに誘われるかのように小林幸枝さんと出会い、朗読手話舞という新しい舞台芸術表現を創出する事になったのであった。

その意味では当会の掲げる「歴史・文化の再発見と創造」を地道に歩んできたと言え、ふる里を立派にヨイシヨしたと言っても過言ではないだろう。

しかし、このふるさとルネサンスとしての風を更に確かな風として吹かせていく先を思うと、些か気が重くなる。先ずはこれからの一年を確実に進み十周年を迎えることが目標となろう。

さて風の会の先も思いやられるが、我が国の先は、と思うと風の会の先を案ずる比ではないだろう。

う。ふる里の先があつての国の先であるが、国の先が不透明になってしまつてはふる里を思うことも出来なくなつてしまふ。歴史はくり返すとは言うが、愚かな歴史の繰り返しは止めなければやって来るのは滅亡しかない。

自然のうねりの中で、恐竜が滅びたのと同様に人類が滅びるのは受け入れるしかないだろうが、愚かな人知で滅びるのだけは映画「猿の惑星」だけで十分である。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

憲法改正問題が急激に膨らんできている。憲法制定の経緯はどうであつても、9条の持つ意味は平安を望む人類普遍の真理を示すものであろう。普遍の真理に対して誰が言ったかの尺度で是非の判断をするものではない。

今、改めて思うのだが、今年が終戦70周年という。しかしそれは違う。敗戦70年である。戦争、そして敗戦に苦しんだのは、戦争を望まぬ市民である。敗戦して終戦をむかえて喜んだのは市民だった。愚かな戦いには平和のないことを知っているのも市民。

己の血を流して戦わない者達が、戦争による利を貪ろうとする。世界で唯一戦争をしないとされた日本国憲法を国民の誇りとするからこそが今必要な事だろう。先日亡くなった俳優愛川欣也が「平和ボケと言われても平和がいい」と言っていたが、戦争を知る者の切実な言葉であらう。

アインシュタインの呟き

菅原茂美

この地球上で、人類は永遠に繁栄を続ける事ができるであろうか？

誰しも漠然と考えれば、百年や千年で息絶える事などなかりと固く信じる。戦争はつきりして、超愚かに見える人類も、それほど馬鹿ではない。環境汚染や人口爆発が酷くなつても、人類は叡智を結集してそれを克服できるはず。理性を失つて、世界の至る所で争いがいくら勃発しようとも、いざ「国連の平和機構」などが強力に機能し、必ず大火になる前に、鎮火するであらう。余計な心

配はしない方がよろしい。

内心、強くそう信じたいが、最近の世界情勢はそうとばかりも言つてられない。イスラム教徒の一部の暴走に、歯止めがからなくなつてきた。イスラム教徒は現在世界で16億人だが、いずれキリスト教徒を抜いて、世界人口の半数に達しようであるとの事。イスラム圏の人口増加率は高く、他宗教をも容認する「寛容さ」があるため、人気が高く、入信者が増えているのだという。

先日ケニアの大学を襲つたテロリスト、アル・シャバブ（隣国ソマリアを拠点とするアル・カーイダ系は、大学に突入し「コーラン」を暗唱できない者はイスラム教徒ではないとして、学生148人を射殺し、79人の負傷者を出した。フランスやチュニジアでも外国人観光客などを襲つた。更に各国からイスラム国へ義勇兵みだりに応援に走つた若者は2万人もおり、それがいずれ自国に帰り、テロを繰り返さないとも限らない。日本だけはそんな事はあり得ないと考えるのは、甘すぎる。

なにしろ「洗脳」というヤツは、かつてのオーム真理教の例を見ても分かる通り、かなりの知識階級でもコロリと騙される。しかも、イスラム教の「ジハード」（聖戦）は、自爆などで死ねば天国へ行ける…と強く教育されている。この世で苦しい日々を送るなら、勇敢に戦つて、天に昇る方ははるかに幸せになれる…。そう固く信じている人には、翻意のための言葉も見当たらない。

なぜこんなに世は乱れるのか？ 何といつても最大の原因は先進諸国との所得格差や、人種差別かと思われる。移民が差別扱ひされれば、肚にすえかね、いつの日か腹饜を試みる。勿論、豊かな国でも勢力争いからテロはしばしば勃発している。

要は人種による貴賤の概念を払拭し、しつかり、仁政が行われ、互いに人権を尊重し合えば、こんな不幸は起きるものではない。大国のおごりや、独善的な社会制度が大きな要因となっている。

さてそれから私が大変に危険を感じたのは、ロシアのプーチン大統領が、ウクライナのクリミア半島をロシアに編入し、政府軍と親ロシア派との紛争で、「核兵器使用の準備」も覚悟していたとの話。大統領自身が後日談としてはつきり記者会見でそう話している。大国の大統領がそんな不見識の感覚でいるのかと思うと、背筋が寒くなる。昔のソヴィエットの亡霊が、再び頭をもたげたかと思つたほどだ。もし今のロシアが、ナトー（大西洋条約機構）と、かなり厳しい局面に遭遇したなら、あるいは核兵器の発射ボタンを容易に押しかねないと、大いに懸念が残る。

【私はこれまで、「愚かな戦争」などという言葉は何回も使つたが、多くの戦友を失い、弾丸の雨をくぐり抜いた人々にとつて、戦後の若造にあの戦いが「愚かな戦争」であつた…などと簡単には言つてほしくない…という記事を読んだ。その時の国家の趨勢にどう抗すればよいというのか。生意気言うんじゃない…。戦争の現場を経験しない90歳未満は、鼻つたれ小僧という事らしい。】

*

●さて本題のアインシュタインのつぶやき話。

先ずその経歴など…アルベルト・アインシュタイン（1879～1955）は、ドイツ生まれのユダヤ人。「相対性理論」で、20世紀最高級の物理学者・現代物理学の父とも言われる。天才の代名詞。アインシュタインは「光電効果の発見」で、ノーベル賞を獲得したが、本命の「相対性理論」は、『人

類に大きな利益をもたらすような研究と言えるかどうか甚だ疑問」として見送られ、レコードのB面がヒットしたようなもの。

ナチスドイツはアインシュタインを「国家反逆罪」として睨んでいるので、1935年アメリカにのり、1940年アメリカ国籍を獲得した。

1939年、ルーズベルト大統領あてに、軍部の要請で手紙を書き、『確信は持てないが、非常に強大な新型の爆弾を作れる可能性がある。この爆弾1個を船で運び、港で遠隔操作をし、爆発させれば、周辺の全てを破壊できる』という原文にサインして発送させられた。急展開で1945年、広島・長崎に原爆投下。大変衝撃を受ける。

『アメリカは戦勝国となったが、平和まで勝ち取ったわけではない。』と述べ、後日、日本人記者に対し『大変、迷惑をおかけした。深くお詫びする』と述べている。

1952年、イスラエル国の初代大統領がなくなると、第2代大統領に：と強く要請されるが固く辞退。彼は1955年、「ラッセル・アインシュタイン宣言」で、核兵器廃絶・戦争根絶・科学技術の平和利用を世界に訴える。同4月18日、腹部動脈瘤破裂で死亡、76歳。

アインシュタインは超天才のように世間から言われるが、本人はいささかもそうは思っていない。ただ『人より長く一つの事に付き合っているだけだ』と言っている。5歳まではよく口もきけず、学校の成績は極めて悪かったが、数学だけは突出していたという。若い時、睡眠時間は1日10時間もと、ただボーっとした感じであったという。

彼の次男は医学生だったが精神病を病み夭逝。博士は大変ヴァイオリン演奏には自信を持っており、

音楽家と、よくコンサートを開くが、彼は数を3つまで数えられなかったと仲間はいう。3拍子が2拍だったり4拍だったりして、コンサートを台無しにする常習犯であったという。

●第1次世界大戦中、戦争を公然と批判し、『2%の人間が兵役を拒否すれば、政府は戦争を継続できなくなる。なぜならば、政府は兵役対象者の2%の人数を収容する刑務所を持っていないからだ』
●ロマン・ローランと大変意気投合し、二人は、命がけで平和運動をする人々に本気で力を貸す。後に「世界連邦」樹立を提唱し、活発に平和運動に身を投ずる。

●ある大学の教授時代、若い研究者の博士論文を教授会が審査していたが、大方はその論文は博士論文に値しないとして却下しそうになった。するとアインシュタインは『博士論文に適するかどうかはわからないが、この論文は間違いなくノーベル賞級の論文である』と評して称賛した。まもなくその若い研究者はノーベル賞を受賞した。天才の心は天才しか読みとれないという事か。

●アインシュタインは妻ミレーバと離婚したが、払うべき慰謝料がない。すると『そのうちノーベル賞をもらいその賞金を全部渡すから：』と約束し、事実(1921年)その通り実行したという。

●アインシュタインは若い頃、バスに乗車中、ベルリンの時計台の針が不動に見えたことから、無名の特許局職員の着想として提出した「特殊相対性理論」を、大学当局は十分に理解できず、代わりに、サブで出していた論文に学位を与え、「奇跡の年」として語り継がれた。

●アインシュタインの「舌」を出した写真は有名だが、これは72歳の誕生日に通信社のカメラマン

が、記念写真を撮るので「博士笑ってください」と注文をつけたら、そんなのヤーだよ：とカメラマンに意地悪く舌を出したのだそう。ところがそこをパチリとやられ、博士もなんとなく気にいって、翌日新聞に載ったというわけ。そしてこの「舌出しパフォーマンス写真は切手にもなった。

●アインシュタインは、原爆の理論を発見した、いわゆる「開発者」の誤解がある。理由は世紀の大発見 $E=mc^2$ の方程式が原爆にも応用される：とする誤解からのもので、この公式は全てのエネルギーについて言える事であり、特に原子力のみに関係した事ではない。

●質量(エネルギー)質量×光速の2乗という事は、質量とエネルギーは等価であるという事。

現在この宇宙は、原子など現代物理学で理解できる物質の割合はわずかに4%である。後は全く正体不明の暗黒物質が26%、8%、暗黒エネルギーは68%、3%である。現在の宇宙に銀河は2000億個ほどあるが、それらは何者かのエネルギーにより猛烈なスピードで拡散を強いられており、そのエネルギー源は全く不明である。結局「負の重力」「反発する重力」とも言われている。

●相対性理論の実験証明の一つは、地上で静止した時計に対し、地球を東周りに高速で飛ぶジェット戦闘機の時計は進み、西回りで飛ぶ戦闘機の時計は遅れることでも証明されている。

●一般相対性理論では、時間と空間は歪む。それゆえニュートンの万有引力の法則は、全面的に書き換えられる事となった。

*

【何年前、私は本誌で「自動車」というなら、人がハンドルを握らず、自動運転できるものを言

え！と書いた事がある。ところが、最近の新聞記事に、電脳が、将棋プロに負けた例は、プロが敵陣に飛び込んだ「角」を、成らずに王手の奇手を指した。電脳はそれを認識できずに放置したために見事に負けてしまったという。今年のプロ対電脳バトル将棋戦は共に2勝2敗。決勝戦はどちらに軍配が上がるか…。

なぜこんな話題を提供したかというところ、AI（人工頭脳）がどんなに進んでも何かの手違いで敗戦ならぬ大事故が起きないとも限らない…。老翁心ながら、そんな心配があったからだ。

今、自動車産業は、各社とも完全な自動制御による（人が運転しない）車を市場に登場させた。日本が培ってきた「モノづくり」の力が、ついにここまで来たか…と内心拍手を送っていたが、実は、アメリカなどのIT技術の導入によるものだという。新幹線・航空機・船舶・電力など、そして、各種事業所ごとの運営ソフト。これらは、いかなる小規模の不具合も、大事故や機能麻痺に通じない。

冷戦時代、米ソ間にホットライン（直通回線）が敷かれた。理由はAIが何かの手違いで、勝手に相手国が核兵器発射のボタンを押したと判断すると、こちらも対抗的にすぐボタンを押し返す。即ち全面核戦争に突入する。人間の本意に反した機械操作が勝手に進行。これほど恐ろしい事はない。それを阻止するために、会話をして人の手で機械の進行を止める。ホットラインの設置は、そのために絶対必要だったのだ。

日本はAIの重要性に気が付くのが遅れ、韓国や中国等が、米国の著名教授などをスカウトして、一歩先を歩んでいるという。資源の少ない日本が生きていくためには、何といっても世界に先んじ

て最先端技術のトップランナーでなければならぬ。石頭の私は何遍でも繰り返す。「国富の第一要件は、教育の充実」。小学生の分教計算もできない大卒を、量産するような今日の教育体制は、早急に改めなければならぬ。それを怠れば、連戦「投了」も、やむなし。】

そこで再びアインシュタインの言葉。

『第三次世界大戦が起こるとすれば、どんな大量殺戮兵器が使われるか私は知らない。但し、もし大4次世界戦争が始まるならば、兵器は間違いなく「石と棒きれ」であろう』と言ったそうだ。この言葉には含蓄がある。

今のところ、世界の良識が、邪悪な心を少し上回っており、世界の至る所に諍いがあるうとも、第3次世界大戦勃発という事態には至っていない。しかし、全人類が幸福で富の分配が平等ならば、余計な心配は不要だが、人間の本能というべきか、より強い者は、より多くの富を抱えて放そうとはしない。要するに弱肉強食で、ずる賢いものが世界の富を独占しようとする。こんな事が永遠に続くようであれば、アインシュタインでなくとも、第2次世界大戦よりもさらに強力な兵器で皆殺しを図るような第3次世界大戦が起こらないとも限らない。物理学にはド素人の私の妄想だが、第3次世界大戦が勃発するなら、おそらく「反物質爆弾」などが発明され、地球上の通常の物質と融合すれば全てがエネルギーとなって消失し、物質は何も残らない。そんな超大量破壊兵器が幅を利かすかも知れない。「物質」でできている女と「反物質」でできている男が、キスをすれば、触れた瞬間に完璧に炎上。骨も何も残らない。残るのは莫

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 5月23日（土）マリオ鈴木ギターリサイタル
- 5月24日（日）長谷川きよしコンサート
- 5月30日（土）國松竜次ギターリサイタル
- 6月14日（日）高橋竹童津軽三味線コンサート
- 7月5日（日）荘村清志ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

大な「熱」のみ。《まあそんなゲキコイ（激恋）なら燃えて消失もまんざらでもないがね》。冗談はともかく、或いは宇宙から殺人光線で一斉射撃。更に私など多少はかじった生物学の細菌戦争。炭素菌の芽胞は100℃の熱などではびくともしない。煮沸消毒など屁の河童だ。そんな芽胞をばらまかれたら、手の施しようもなからう。

【もし私が作戦本部のスタッフに選ばれたら、狂犬病ウイルスのゲノムを、新型インフルエンザウイルスに組み込み、敵陣に飛ばす。こんな朝飯前だ。しかし、私はこんな兵器の完成前に、必ずそれを焼却処分するに違いない。】

アインシュタイン先生でさえ、第3次大戦ではどんな大量破壊兵器が使用されるか、想像もできないと言っている。世界の片隅で、かすかに生き残ったほんのわずかの人類は、もうケンカはしないであろうが、もし、またも大戦を始めるとすれば、いにしへの原始の戦いに戻り、石ころを投げるとか、棒きれを振り回すか。それくらいが関の山……という訳だ。

「代3次世界大戦」。人類とはそれほどまでに愚かな生物なのであるか。かつての歴史が示すように、いくら残忍性を持った遺伝子を保持するとは言え、かろうじて、「種」を繋ぐ低度の人口しか残らない。そこまで、せん滅作戦をする「愚かな戦争」を繰り返すのであるか。

過日「ひろしま」という映画の試写を観た。火炎放射器で地上を這いまわるダンゴムシでも殺すような、あの残酷さ。これが今日まで進化を遂げた「人間の決断」で実行される戦闘行為なのであるか。戦争を早く終わらせるためとか何とか、ごまかしの言葉はいくらでも後から付け加えられるであろう。しかし、人間が本来持っている「良心のかげら」でもあるなら、あれほどの決断は、誰かが阻止できたはず。映画のセリフにもあったが、白人は有色人種の命など、ムシケラぐらいに思っているのであるか。

今から7万年前ホモサピエンスは、150人ぐらいでアフリカを飛び出した時、全て黒人であった。その後、サウジアラビアから北方へ歩を進め、最も緯度の高い所まで進出したグループの肌は白くなり、東方に進み、中緯度にとどまったのが我ら黄色人種だ。「遙かなる旅路」の果て、紫外線の濃淡により肌の色が変わっただけの話。肌の色に

より、人種の貴賤など、どこにもありはしない。アインシュタインが心配したような人類の大半が死滅する「愚かな戦争」は、何が何でも起こしてはならない。

地域に眠る埋もれた歴史(2) 木村進

かすみがうら市出島地区(2)

○南円寺

湖の先端に行くのに通りを走っていて偶然見つけた「花の寺」の看板を発見しました。

「五智山南円寺」と書かれています。一度通り過ぎて気になって戻って寺の駐車場へ車を停めました。駐車場も整備されていてきれいな寺です。1374(応安7)年、この地を治めていた小田孝朝が、小田城の守りとして定めた小田領4ヶ寺(普門寺、大聖寺、法泉寺、南円寺)の一つだそうです。

前に筑波古道である「つくば道」を歩いていて道の途中にあったお寺が「普門寺」で、この名前を懐かしく思い出した。

小田氏はこれら4つの寺を祈願所(小田四箇寺)に定め、寺もこの(鎌倉・室町)時代に勢力を拡大したようです。また当時の普門寺は僧兵五百、こちらの南円寺は僧兵三百となっており、末寺もそれぞれ百以上持っていたそうです。

この話から石岡(府中)の三村城の秘話を思い出しました。府中城の大掾(だいじょう)貞国の弟の大掾常春(つねはる)がこの小田氏の進入を防ぐために恋瀬川の対岸にある三村の城主となって守っていたが、1573年に落城し、常春は25歳の短い

運命を閉じました。

また、この攻防を聞いた府中城から応援に駆け付けた援軍は、恋瀬川の高浜に近い対岸の高台で城の燃えるのをながめ、間にあわなかったのを嘆きその場で自害した。その数197人。麓の香勢堂墓地に地蔵が建っています。この三村城(現三村小学校敷地)とこの南円寺とは直接台地につながっており間にさえぎるものはありません。小田氏との攻防も厳しいものがあつたのだという感じが伝わってきます。

また先に書いた歩崎の観音様(行基菩薩の作といわれる)と同じ木で作られた三体のうちの一つがこの寺にあるといえます。国宝級の茨城三観音といわれるらしい。どんなものか見て見たい。(歩崎の観音様はその後毎年夏に御開帳されることになったので見るできませんでした。本当に素晴らしい仏像でした)寺の山門を入ると梅や桜の木が迎えてくれる。寺の境内には「長谷寺」の案内が書かれていた。奈良の長谷寺も真言宗豊山派の寺で十一面観音を本尊としているので、こちらも同じ豊山派なのだろう。

奈良長谷寺は牡丹の花が有名なので、こちらにも牡丹があるのか?

庭を見て回ったら、シヤクナゲの木がいくつか目についた。シヤクナゲといって思い出すのは女人高野室生寺である。こちらの室生寺も真言宗(室生寺派)で国宝の十一面観音像がある。

咲き始めた紅梅とバックの赤い鐘楼堂がきれいなコントラストを映していました。

そしてすぐ近くには白梅が僅かに花を咲かせていました。南円寺の山門をくぐったところに変わった石板(石像)が並んでいます。

お釈迦様の生涯を描いた大きな石板です。

「釈迦の誕生」から始まり、「出城」、「苦行」、「降魔修業」、「初転法輪（ほうりん）」「竹林説法」（祇園精舎・竹林精舎で説法 最後は「涅槃（ねはん）」です。80歳でついに死を迎えます。頭を北に顔を西に向け横たわった釈迦を弟子たちが悲しそうに見守っています。さて、琵琶法師が語り伝えた平家物語の有名な冒頭部分

「祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす」

この解釈も釈迦の話聞いてみると解釈がわかってきました。「釈迦が説法をした祇園精舎の鐘の音は、この世の全てのものが消滅流転すると言う真理を告げる響きがある。釈迦が入滅したとき、その死を悲しんで、沙羅双樹の花の色も俄かに白色に変わり、枯れてしまったという。どれほど栄えたものでも必ず衰える時が来るものなのである。」そんな意味でしょうか。

○奉安殿

南円寺を出て少し行つた「下大津小学校」の道路の反対側に奉安殿（ほうあんでん）というの名前の石造りの大きな金庫のような構造物がありました。戦前に教育を受けた人にはなじみのものだったのかも知れませんが私は知りませんでした。

奉安殿には天皇・皇后の写真と教育勅語を入れて各学校（尋常小学校や旧制中学校）に設置され、式典やその前を通る時には服装を正し最敬礼するよう義務つけられたそうです。

色々な形のものがあるようですが、耐火を考慮して石作りの物が多く建てられたといえます。終戦後、GHQの命令により取り壊されたり、地下に埋められたりしたものが多いようです。茨城県

では同じようなものが旧真壁駅の近くに保存されています。

天皇崇拜信仰的なことが、戦後教育から全て削除されたとしても、昔の確かに存在したという記憶をどめる貴重な資産だと考えます。

戦後の教育が日本国民と言うアイデンティティを否定するものならそれは間違つた教育でしょう。戦時中の軍国主義的な教育などたしかに嫌いですが、でも日本人でないような教育も嫌いです。この地区は戦国時代までは小田氏の領域だとすると、土浦やつくばなどつながりが深そうです。すぐ裏手の広場にはかなり古い古木が数本ありました。

このような古木が残されているのを見ると、そこに暮らしていた人々の思いを考えてしまいます。この下大津尋常高等小学校は明治36年の創立と書かれていました。

○椎名家住宅

南円寺から更に少し進んだ出島の湖に出る途中の街道沿いに「椎名家住宅」という看板が出ていました。その看板から細い横道を入って見ると、かなり立派な昔の住宅が残されています。こんなところにと不思議な気がしたのですが、どうやらこの民家はすごいものでした。

東日本で記録のわかつているうちで「もつとも古い民家」だといえます。国の重要文化財です。

こんな場所にと不思議な気がしたが、やはりこのあたりは古くからの何かがありそうな気がしてきました。この椎名家住宅が建築されたのは1674年で、徳川4代将軍家綱の時代だそうです。もつとも昭和後半に解体修理したそうですが昔を復元したといえます。金・土・日のみの見学と書

かれていたが、訪れたのは木曜日。でも戸は開けられ、一応暗い中は見ることができた。土間にはかまどと農機具などが置かれていた。今から340年くらい前の民家として考えると、この椎名家はこの辺りではかなりの豪農であつたのだと思う。藁葺屋根の造りなどたいへん興味深いものがあります。住宅への入口には大きな古木（榎）が残っています。

○崎浜横穴古墳

出島地区を調べて地図を見ていたら少し変わった古墳が載っていた。

これは霞ヶ浦沿いを走る県道100号沿いの崎浜にあつた。この辺りも何度か車で通つたことがあつたが見落としていたようだ。

「崎浜横穴古墳」という。一般的な土を盛つた古墳は霞ヶ浦沿いにも多くあるが、この古墳は変わつていて、壁面に横穴を掘つて棺を安置するもので、このような古墳はあまり聞かない。

少し北へ行けばひたなか市の「十五郎穴古墳群」があるが、茨城でも南部ではほとんど見つかつていないという。十五郎穴古墳の横穴は100個以上あるらしいが（史跡指定は³⁴基、ここの横穴は¹⁶基が確認されているという）。

昔、埼玉県の「吉見百穴」を見学したことがあり、横穴古墳も知っていたが、こんなところにもあつたことは知らなかった。街道沿いに穴が並んでいて、他の横穴古墳群と違っているのは、横穴の壁面は貝塚で、貝がびっしり積み重なっている。貝殻はほとんどが牡蠣殻でびっしり積み重なっている。左右と奥が高くつた穴があつた。恐らく家族の遺体を安置したものと思うが、左右の高い

部分にお棺を安置し、奥の高いところには副葬品が置かれたようです。この穴の大きさは人がかかんで中に入れるくらいあります。場所は霞ヶ浦につきだしている崎浜地区で、この場所から湖側を眺めると蓮田池（レンコン水田）が広がっています。

○宍倉城本丸跡

霞ヶ浦大橋の手前から石岡三村の方に向かう街道（県道118号）があります。

あまり特別に観光するところもないところなのですが、ここに「宍倉城本丸跡」があります。この城は永享年間（1429年～1440年）に野口遠江守が筑城し、その後小田氏の有力家臣である菅谷氏の城となっていました。その後小田氏が佐竹氏に追い込まれていく中でどうやら佐竹氏側についてたようです。

しかし、佐竹氏が秋田（出羽）に移ると（1602年、佐竹氏と共に秋田に移っていきました。そしてこの城は廃城となりました。

県道の入口に矢印看板があり、入口道路は車1台が入れるくらいの広さです。

手前で車を停めて、歩いてみてみました。そこは広い畑が一面に広がる台地です。

訪れた時はもう夕方日が沈みかけています。一面畑が広がり、周りに梅の木が数本あります。本丸の大きさからするとかなり大きな城だったようです。またこの城の周りには家臣の住宅などを配し、大きな城郭を形成していたようです。この台地の一角に「城之内稲荷神社」が置かれています。

土塁などはよくわかりませんが、この台地を囲むように堀が掘られていた形跡が残されています。

稲荷神社には狐さんがいます。神社から本丸跡を眺めてみました。この狐さんもうやらそちらを見ています。

地理的に見て三村城で北の敵へ攻めるために城を出たすきをつけて、攻めてきたのはこの菅谷氏あたりが小田側の主力だったのかもしれない。石岡側から見ているだけではまわりの情勢が見えません。こういうところも見ておくことも必要です。

○戸崎城跡

前に書いた南円寺や奉安殿の残っていた下大津小からほど遠くないところに、戦国時代まであったという戸崎城の本丸跡があるというので行ってきました。霞ヶ浦湖岸側の県道118号線の戸崎から北へ登るようにも入れるが、1977号線側にも案内板があつたのでこちらから行つた。県道から入つたところにかなり古い「香取神社」（かすみがうら市加茂4834）があつた。県道から入つてすぐ道は神社をまくように左右に分かれて向こう側で一緒になる。

この神社一角はかなり大きな古木が数本ある。どうやら戸崎城の家臣の館などが近くにあつたようだ。神社はあまり特徴もないが裏に本殿がある。神社の鳥居の脇には大きな椿の木があり、この神社に彩りを添えていた。神社参道わきには、こぶの多い数百年の櫟の原木が数本天に向かつて枝を伸ばしていた。左手の畑の向こうに、山の白梅が一面を飾っていた。

ここから戸崎城本丸跡まで、両脇にハス田が続く間の道を進む。突き当り正面に池があるところを右に行くと城の守り寺「松学寺」があるが、本

丸跡には左側をぐるりと回り込むように道がある。この城についても、宍倉城と同じような経緯をたどっている。かなり大きな山城で、まわりをハス田に囲まれたような小高い丘の上に本丸跡があつた。この城も宍倉城と同じように小田氏の家臣の戸崎氏の居城だったが、佐竹氏の軍門に下り、佐竹氏家臣が管理するところとなり、佐竹氏の秋田への転封により廃城となつた。

台地の上は畑と草が生い茂つた地となつていました。本丸の入口から西に下りる道が続いています。こちら側には二の丸があつたようです。

本丸の台地の北側は崖になつていてその下にはハス田が広がっていた。NHKのドラマ「利家とマツ」の撮影の一部がこの近くで行われた。

○ガガイモ

戸崎城本丸跡で面白いものを見つけた。城跡には畑が広がり、その周りには枯れ草が残っていた。その枯れ草の中に変つた小さな舟のような形をした実があつた。どうやらガガイモの実だと思う。半分に分れて、中の綿毛のついた種はすでにどこかに飛んでいってしまったようだ。日本神話ではスクナヒコナはこんな船にのつて日本（出雲）にわたつてきた。そして、日本に薬の知識を教え、温泉も掘り当て、温泉が体に良いことを教えた。この小人「スクナヒコナ」は薬の神様でもあり、温泉の神様でもある。

スクナヒコナ（少彦名）が乗っていた船が天乃羅摩船（アメノカガミノフネ）なのだが、これがガガイモの実だというのだ。

ガガイモの実には秋に実が割れて冬には綿毛のよな羽根がついた種がたくさん風に飛んで散らば

っていく。この時期はもう種はみんな飛んでいったが殻が残る。この殻はちょうど水に浮かべれば船のように浮かぶだろう。

出雲に渡ってきたスクナヒコナは日本語が喋れなかった。物知りの「山田のかかし」が素性を勝手に知らせただけだ。日本の国造りで大國主命の手助けをして、ほぼ国の統一を成し遂げると、粟の茎に登ってその茎の弾力ではじかれて常世の国に飛んでいった。

この粟の場所が現在の和歌山県加太の淡嶋神社とされる(別の場所という説もある)。飛んでいった先は常世の国だからきつとこの茨城だろうと勝手に想像している。茨城でスクナヒコを祀る有名な神社は酒列磯前神社と大洗磯前神社である。こんな鳥のような草の実がなぜ神話に載っているのだろうか？

この常陸の国は縄文時代には一万年以上にわたって平和に暮らしてきた縄文人がいた。塩も鉄も採れた。紀元前にはまだ日本に国家はなかった。少なくとも、この常陸には縄文人が木の実や貝を食べ、魚をとり、獣を追いかけて暮らしていた。食べ物も豊富で、まさに常世の国だった。塩もたくさん採れた。製塩技術もあった。

この戦国時代に小田氏・佐竹氏の勢力争いで滅んだ戸塚城の何にもない昔の城跡と言われる野原に残されたガガイモの実から、色々な事が走馬灯のように駆け巡ってくる。この地ももうすぐ春の息吹が感じられるだろう。

この台地の下は蓮田が広がっている。

(記事は2012年3月末頃のものです)

玉里御留川学習会を終えて

伊東弓子

玉里御留川の内、玉里地区を前回で終わった。平成二十五年の三月から二年の間に七コースを歩いた。菌部川から山玉川の間、漁場があった場所を想像し、「六井六畑八館八艘」を目にしながら、地元の案内協力もあつての旅立ちだった。参加者は百四十人弱、一回で十七〜十八人というところ、子供は九人足らずだったが、賑わいを添えてくれた。大人の先を走り、後を追ってきた。見えぬ漁場を見ようとしている大人達との時間を共有していた事は、何時の日か何かの芽を吹くだろうと思う。二〜三ヶ月に一回の実施で土、日曜の午前中、雨模様で翌日になった時は、流石に人は少なかった。若い人はよくよく少なく六十〜七十代が大半で男女半々という状況だった。費用は会員の会費と当日参加者からの資料代として頂くお金で賄われた。チラシは沿岸の家々に配り、市内、近隣の公的な場所、店に置かせて貰った。知人への誘いも忘れなかった。チラシの印刷、相談の際の場所で収支はほとんどという具合だった。

ここで次への出発に入る学習会が計画された。リレー・トーク形式で、パソコンを使用し、展示で雰囲気づくりをしていく、という大きな柱が出来た。人前で話すことに抵抗のある人もいるだろう。機器使用への心配もあった。(出来ない私が心配するのも可笑しなことだと思う)人がどのくらい集まるかと、切りがなく不安に包まれた。一人で遣るんじゃない。九人で遣るんだ。みんなで力を出し合うんだ。と思い直し、あの日の展示物を生かせる喜びも力となった。四つの柱を立て、四人が手分けして学習してきたものを発表すること

に決定すると、私も腰をすえることが出来た。

当日の彩りも楽しく考えた。季節の花、紅梅と白梅を朝、知人の山へ貰いに行つて飾ることが出来た。今までのチラシ、資料「玉里御留川」の本二冊の展示も引立った。また四人の話しの間に休憩をとり、その際茶と金平糖二〜三個出す用意と、学習会が済んで茶の席を持つ時、鯉の和菓子で「お疲れ様」をしたいことも女達で考えておいて貰った。

開会式の中で、池上先生ご夫妻の指導の下で本の製作に加わった一人一人を紹介して労った。

口切りは、石橋さんで玉里古文書研究会の一員として、諸家文書作成に携わった事から始まり、御留川の制度が設置された時代背景、水戸藩の時代の、出来事等や御留川二百四十年の終焉の幕末期の背景を力強く話してくれた。鈴木家文書は御留川に関する物だけであつたこともつけ加えていた。次は山口さんというところで、「一寸休憩しませんか。私も緊張しているもので」と声が掛つた。タイミングよかつた。立ち出すと同時に茶一杯が配られ、チョコ三個づつ小さな紙皿にのせられた。戻つて来た人達の口から心の中へと入つていったことだろう。これは実によいアイデアで、後への緊張を解かしてくれる元となった。

山口さんは、生まれ育つて今生活している大井戸、平山地区を中心にした漁場、漁法、魚具から御留川を語ってくれた。幼い日から見、聞きしてきた事は、もう殆んど見られない貴重な語りであった。未発表の「宗御前祭祀日記」が一冊出てきたことで、今回紹介の運びとなった。御留川と係わりのある六軒で続けた祭りの内容も新しい発見の喜びだと、玉里言葉も交じつていて味のある話

しだった。

本田（学芸員）さんは、鈴木家に纏わる話を専門的に話してくれた。鈴木家の文書を扱うに至った経過、戦後の文書に対する考え、市有形文化財、歴史資料第三号としての品々、鈴木家文書の研究史としての品々、古文書群、巻物、書籍、扇面和歌、絵画、玉里御留川図、霞ヶ浦絵図、工芸品等について実物が目の前にあるかのように吸い込まれて聞いた。

最期は私の番だった。玉里時代のご主人池上社会教育主事として、歴史の掘り起こしやこの故郷にあった文化づくりを積み上げてきた方だった。和子先生は玉里古文書の発掘と、地域で古文書を解読していく努力を三十年以上も続けられて、多くの人達を育ててきたことの素晴らしさを話した。玉里御留川製作に取り組んだ五年間の経過と作業風景や内容を話した。御留川の中のエピソード、作業中のエピソードなど、ついつい力が入ってしまった。あの時間を提供し、能力を惜しまず私たちに与えてくれたにも拘わらず、報酬も賞賛もなかった憤りも訴えた。（少し後になって小川の古文書の先生と話した時、憤るだけではだめだね、その時携わった人達が中心となって動かなければ、行政など動かせないものだ。との助言があった）全くそうさ。私たちの愚痴でしかなかったと思ひ、大いに反省した。そういう事も「御留川を歩く会」を生み出す原動力となったのだろう。

途中で帰る人もなく、最後まであの部屋をうずめてくれた一人一人に感謝して幕を閉じた。

片付けの済んだ茶の席に、請負人から漁師共に振舞われた鯉の和菓子で話しが弾んだ。笹の中の笹の上の鯉、献上鯉とは一寸違う憎いアイディア

だと自分を誉めてみた。

今回は、歩く会の時と違った顔ぶれだった。役員は兎に角、新顔の人が多かった。友を連れ、知り合いを誘って来てくれた人達だった。歩きを楽しむ人、御留川を知りたい人、二つの流れがあることに改めて気がついた。

本を購入して欲しかったが、商売上手でない私の声かけでは難しかった。

資料代を参加費にした方がよい、と気がついた。

「とてもよかった」「本当によく出来た」と言ってくれる人もいた。そして「この感動を先生に伝えたいね」という。「私、葉書を書こうと思っただが、一歩引いたよ」と言う。そう言わずに感動したことはその人が伝えて欲しいものだと一人思ってみた。

大分時が経ってからの、かすみがうら市千代田地区の方から電話があった。

「懐かしい言葉を高浜で見ました」と話しが続いた。加賀藩の御留椿の話で、薄桃色の八重椿のことだそうさ。城内から持ち出さないように厳しく留められていたにも拘わらず、城外に出たことが発覚し、打ち首になったという。御留山然り、他にも数あることだろうと長い時間を語りあった。

今回は高浜地区、そしてその先三村、石川と進む。知人も少なく地形、歴史や他いろいろの点で知識不足の場所に行くことになる。その反面、知らぬ人達との出会いがあり、その地域を知る機会になる。又そこから故郷玉里を眺めることが出来る。この事はとても素晴らしいことだ。自分も振り返ることが出来ると思う。スピード、金銭が優先する時代に、自分達の手で、足で、目で、心で作りあげていくものを大切にしていきたい。遠い

日を感じ、先の日を想い、大自然の中の一員として歩いていきたい。

県指定文化財 2 兼平智恵子

石岡市立石岡小学校敷地内に約四十年余り、石岡の伝統的な生活文化、伝承文化をお伝えしてきた石岡市立民俗資料館（昭和四十八年石岡市立石岡小学校創立周年記念事業のひとつとして開館）は、平成二十七年四月一日、「石岡市立ふるさと歴史館」として改称され、展示内容は歴史を主とし市民の皆様へ地域への関心を持ってもらうことを主眼としてスタートしました。

月曜日を休館とし、火水木金土日そして祭日、入場無料、午前十時～午後四時半迄、開館しております。館内の現在の展示は二階が常設展で、石器、縄文、弥生、古墳、飛鳥、白鳳、奈良、平安、中世、近世、近代とそれぞれの時代の発掘された遺物等主に展示されております。

一階には二ヶ月ごとに展示替えが行われる企画展。四月、五月の現在は「石岡の陣屋門」展が行われています。尚六月、七月は「土屋辰之助と石岡の看板建築」展が予定されています。

常陸風土記の丘の資料館内や駅前観光案内所等当番で案内していると、市内の方ですと殆ど、石岡にこんな古い歴史があるなんて……、主に県外の皆さんはもともと歴史の里いしおかを宣伝しなくては……、の聲がとてつもなく多いです。また、見学の為の下見にいらした方が石岡の人に歴史を尋ねると分からない人が多いと驚いていた人もおりました。勿論、石岡の人は親切、丁寧に

その場所まで案内してくれましたと：喜びの声も少なくありません。

昨今の歴史ブームにのって市民の皆さんが石岡の歴史を知り、そして触れる事が街おこしの大きな原動力になる事と信じております。

どうぞ次世代を担うお子さん、お孫さんそしてご夫妻、又友人と一緒に郷土愛を育む為にも、ご来館をお待ちしております。(ふるさと歴史館は石岡駅から徒歩で十五分位です)

「石岡市立ふるさと歴史館」の開館をお祝いして、前書きが長くなってしまいました。

— 今回の県指定文化財のご紹介に入ります。

○銅造阿弥陀如来三尊像 有形(彫刻)

指定 昭四〇・二・二四

石岡市茨城に所在の萬福寺に伝わる銅造の阿弥陀如来三尊像で、三尊とも一鑄で、本尊の大きさは、高さ四十九・二cm、脇侍の観音菩薩が三十三・八cm、勢至菩薩三十三・五cm。本尊は善光寺様式を踏襲(今までのやり方を受けついで、そのまま行うこと)した基準作で、制作年代は鎌倉時代で、中尊像の心木には永仁三年(一二九五)三月十八日の年紀のほか、檀那・勸進僧・大工などの人名が記されている。

残念ながら私は、開帳にお会いしたことがありません。萬福寺は先月第一〇七号で紹介しました税所文書の税所家、常陸在庁官の税所貞成氏の開基となっています。

○木造十一面観音立像 有形(彫刻)

指定 昭四〇・二・二四

所在地は若宮一丁目八番二十三号、旧若松町内の長法(肇)寺に伝わっていたとされ、明治三年二

月十日の大火の際、寺から唯一搬出され、現在は観音堂に安置されています。

頭上に十一面の化仏が配置されていたが、残念ながら現在はずべて失われている。像高一四一cmを測る寄木造で、面長な面相をもち、腰をかすかに左にくねらせ、両膝をかがめている。折り返して二段に設けた裳が、複雑な衣紋を作り出している。これらのつくりには宋風の影響が強く感じられるが、技法・表現とも地方色がみられ、造立は在地仏師によるものと言われ、制作年代は室町時代頃と思われる。

○木造十一面観音座像 有形(彫刻)

指定 平一八・十一・十六

所在地は田島一の二の三〇、現在、天台宗に属する金剛院の本尊として祀られています。もとはその近くに所在していた三面寺(廢寺)の本尊であったと伝えられている。檜木材寄木造であるが、本体部は鎌倉末期から南北朝の初期のものと思われ、穏やかな衣文の表現でまとめており、全体に安定感のあるつくりとなっている。他の両腕、天衣、膝前などは江戸の中頃に補足し、台座、光背、頭部の飾金具、持物は江戸末期のものと思われる。本体の古い部分は保存状態も良く、鎌倉から南北朝の仏教美術を知る上で貴重な資料となっている。

私は五年前頃に特別にご開帳頂き、その地区の皆さんの手厚い保護のもとに鎮座する観音さまの慈悲の心をもった端正な面相が印象的でした。その当時、ご開帳は毎年、正月、二月の節分、五月一日といずれも午前五時から十時迄行います。とそこの地区の管理なさっている方がおっしゃってました。

是非ご参拝をお勧め致します。

参考資料 石岡市の文化財 石岡市教育委員会発行

・緑出ずる そよぐみどりのメロディ 智恵子

立川『LaLaLa公演』

小林幸枝

四月十九日、東京立川のイベントハウス「LaLaLa」

で公演を行って来ました。イベントハウスは、

プロデューサーのしおみえりこさんが、廃墟になっていた建物を大勢の表現者仲間の人達が集まり、手づくりで改装した多目的イベントハウスです。

立川でアトリエ公演をするよ、と言われただけで詳しいことを知らされていなかったもので、出かけてビックリ。外から見たら唯のぼる家風。中に入ったら、またビックリ。どこかのリゾートペンションにでも行った感じ。

ベランダの窓から見える景色は、都会の真中とは思えない新緑と遠くに見える多摩方面の山々。ベランダの下は緑地公園になっていて、春の花が綺麗に咲いていた。

イベントスペースは、三十人ほどの客席が作れグランドピアノが置いてある。色々な作家たちの作品も並べられてあり不思議な空間に本当にびっくりしたけれどいっぺんに気に入ってしまった。

私たちの公演の前の週に手話パフォーマンスのグループの公演をやったそうで、その時には五十人も観客を入れたのだそうだ。

公演の日の朝、父と母が来てくれたのですが、

父は皆の手作りのハウスが気に入って、石岡にも沢山空家があるのだから、こんな風に手づくりリホームをして活用できれば良いのに、と自分もやりたそうに言っていました。

公演は、二十数名の方が集まって下さり、私の友達以外は殆どの人が何らかの表現者の方ばかりで、普段の公演ではあまり伺えない手話舞に対する評価を頂けたことはとても嬉しかった。

友達の紹介でピアニストと三線の演奏者の方が来てくれ、白井先生と話しをして、機会を創り一度コラボレーションしたいねと新しい広がりを作ることが出来ました。

クラリネットの橋爪さんと一緒に演奏をされているピアニストの方から、一つの言葉でも聾者の使われる手話にはこんなにくさんの表現方法があることを知ってちよつとカルチャーショックを受けました、とお話しを頂き、表現者の人達の目は鋭くて怖いなと思いました。

今年は、十一月頃にもう一度 LaLaLa 公演をしようか

と言われていますので、楽しみにしています。

六月は、手話舞を加えた新緋桜祭節を演じます。新しい小林幸枝を見て頂ければと思います。応援宜しくお願いいたします。

【風の談話室】

ひるると風もついで満九年となりました。

振り返れば、ふゆふゆと想ひ氣持とまだ九年かとの思ひが混じりあっています。

どちらも本当の気持ちですが、九年が終り、次は取り敢えず十周年をこぎまいてあります。

この「風の談話室」では皆様からの投稿を募集しています。毎月二十五日が締め切りです。原稿には住所・氏名・電話番号・筆名希望の方は筆名も併記してください。テーマは自由。400字詰め原稿用紙5枚程度。投稿、お待ちしております。

《読者投稿》

養生日記（詩二編）

堀江実穂

「新しい風」

私はもう無理して笑わなくていいのね

私はもう無理してはしゃがなくていいのね

新しい職場 新しい人間関係

新しい空気の中に自然でいられる自分

とても幸せだよ

今までの自分は顔の表面が笑っているだけ

もうそんなエネルギーは使わなくていいのね

新しい風は優しい

自分でいられることは楽しいし心地いい

もう仮面はいらない

もう自分を縛らなくていい

風が吹いたら空をみわたし

気持ちいいと感じればいい

私に新しい風が吹いた

「救いの手」

一人で苦しんでいた自分

一人で悩んでいた自分

すべてを抱え込んでいた自分

気付いた

人に頼ってもいいんだ
ひとに甘えてもいいんだ

自分に言い聞かせた
もういいんだ

説明や解決はいらない

頑張りもいらぬ

友は教えてくれた

頑張りや無理は心を閉ざすだけだと

気持ちが楽になっていく

素直なありがとうの言葉がうまれる

もういいんだと友は言った

温かく爽やかな風の中に私は目覚める

明日は自分を好きになろう

そして

明日は人を好きになろう

堀江さんに心の養生日記として詩を書くことを勧めもつとれくらいになるだろうか。四月は四篇の詩が届いた。伝えたい、伝えようという意識が前面に出てきた時は、詩になっていない。堀江さんの心の揺れのそのままに良い詩があったり、詩でなかったりするが、詩を作るう、詠もつとすことそのものが詩を書くことと励ましのメールを入れる。

× × ×

言葉を考えなくなった時、詩がうまれる。

言葉を考えること説明が顔を出す。

言葉は、真実は伝えない。言葉が伝えるのは事実だけ。言葉とは事実と事実の隙間にひびくこと。隠れている。言葉で真実を伝えようとするな。真実を心に籠めて、確かな事実の言葉を紡いでいった時、言葉と言葉の隙間から真実が顔を出す。言葉で真実を伝えようとするのは、真実は遠くかたいてい

く。……脚本を書く時、文章を書く時、この事をいつも念頭に置いて原稿用紙に向かう。
堀江さんの詩を読みながらこんなことを思い出した。

《ことば座だより》

手話舞と聾語

白井啓治

4月19日、東京立川のイベントハウス「LaLaLa」

で朗読手話舞の公演を行って来た。音楽家をはじめとする表現者たちが来てくれ、嬉しい評価を頂いた。中でも、小林の手話舞を観て、万葉集に歌われる「妹」の言葉の手話表現があんなに多彩にあるとはカルチャーショックを受けた、との言葉は、ことば座そして小林にとっては最大の賛辞であった。

アトリエ公演なので、後で対話を持てるようにと、来場者に手話と手話舞についてのプリントを配ったのであるが、その時のプリントを紹介したいと思う。

『手話舞について』

聾者の人達には、言語学的には確立されていませんが、もともと聾語というべきものがあつた。ここで言う聾語とは、言語学に言う伝統的手話とは少し異なる。

中野善達・吉野公喜編著「聴覚障害者の真理」の中で伊藤政雄氏が書かれた「日本手話の言語的構造」で次の様に述べている。『手話には「話しことば優先手話」と「イメージ優先手話」とがあり、

前者は、ことばが優先して、手話が後から追いかけていく”のに対し、後者は、自分なりのイメージを手話で表す”、イメージから話しことばに係なく手話が出てくる”』と。

このイメージ優先手話がここで言う聾語の概念に近い。

ことば座の主張する聾語も伊藤氏の言うイメージ優先手話も健聴者の人達には認識・理解が難しいものである。しかし、この聾語あるいはイメージ優先手話の表現を聾者の独特の才能として理解すると、その言語としての動作表現は、優れた舞や舞踏と言え、舞台芸術としての新たな方向を導いてくれると言える。

小林幸枝の手話舞は、個々人の感性としての聾語・イメージ優先手話をベースに日本語対応手話を融合した「舞い」あるいは「舞踏」として表現している。

ことば座では、この表現形式を「朗読手話舞」と名付け、呼んでいる。

『朗読手話舞の構築について』

言葉には、「事の事実や意味を伝えるための説明の言葉」と「時々々の心・気持ちを表現する言葉」の二つの側面がある。また見方を変えると同じ言葉であっても「事務的な言葉の使い方」と「心に響く言葉の使い方」とがある。

ことば座の行っている「朗読手話舞」は、心に響く言葉・豊かな言葉を愉しむという翻訳芸術表現ということが出来る。

先日の朝日新聞のコラムの中に小林秀雄のあるチュール・ランボーの詩の翻訳について書かれていたが、朗読手話舞とはまさにこのコラムで紹介

された翻訳の話に類する。

そのコラムには『原文はコンマをはさんで「季節(セゾン)」「城(シヤトル)」という言葉が二つ「オウ」という溜息と共に並ぶだけ。普通ならば「ああ季節、ああ城」と訳すところ。これを小林秀雄はなんと「季節(とき)は流れる、城砦(おしろ)が見える」と訳した』とあつた。

朗読手話舞の構築課程はまさしくこの翻訳文学の創作と同じといえる。

台本として「万葉集」とその現代語訳を小林幸枝に渡す。小林は小生の渡した現代語訳を読んで、手話通訳(意味を伝える)ではなくイメージ手話で翻訳を試みる。そのイメージ手話或いは聾語に翻訳された舞い動作としての言葉を見て、それを再び万葉集の原文に翻訳し直して朗読する。これが朗読手話舞構築のプロセスである。

このようにして構築された朗読手話舞について、ことば座の設立当初から応援いただいている吉野公喜氏(元東日本国際大学学長・教育学者・障害児教育・聴覚障害・知識・知能と情報等書多数)よりこのような言葉を頂いた。

『朗読手話舞の公演は、いつも楽しく心豊かな時間と空間に過ぎなってくれる。感激このうえない。朗読手話舞にみる音声言語と手話のもつ世界(手話言語)とのコラボレーションは、意味深い言語学的哲理を秘めている。言語表現における表層と深層の構造的成り立ちを否応なく意識させてくれる』と。

小林の着替えの時間を利用して、配布したこのプリントをもとに、聾者の言語表現について、手話舞の構築について等の実際的考え方などを話し、

その後いろいろな質問にお答えしたのであった。小林の手話舞と小生の説明と質疑応答で、来場いただいた皆さんには手話への新しい認識を持っていただくことが出来た。と同時に新しい舞台表現芸術としての手話舞に大きな評価を頂くことが出来た。

東京は人口が多い分だけ、舞台観賞力の高い人も多く、小林には大きな刺激になった事と思う。特に、三十名程度のアトリエ公演では、観劇だけではなく直接の対話を持って、鋭い批評を受ける分、演者には緊張感があつてやりがいがある。

今年、十一月頃にもう一度出かけて行って、舞台を創ろうかと考えている。

《一寸一言・もう一言》

一寸一言

安全地域の危険

打田昇三

「♪明日はチュニスかモロッコか、泣いて見送る後影、外人部隊の白い服…」という歌があつた。大部分の日本人は其の程度しか知らないチュニジアの首都・チュニスのバルドー博物館で日本の観光客がテロに襲撃された。チュニスは、かつてPLO（パレスチナ解放機構）のアラファト議長が居た都市である。あの当時の紛争地帯と言えば、イスラエルとPLOが対立していた狭い地域であつてイスラエル寄りの（親米的な）国の国民にとつて危険な国と言えばチュニジアであつたらう。

しかし現実のチュニスは背景に筑波山そっくりの山を持つ穏やかな都市でテロなどは想像も出来なかつた。事件現場となつた博物館は貴重なロー

マ帝国時代のモザイクやアルファベットの原形などで知られている。テロは場所を選ばない。一九五六年にフランスから独立したチュニジアは産油国では無いが歴史ある落ち着いた近代国家と言われた。テロを起こしたのは異国人である。

「犬も歩けば棒に当る！」今は何処が危険で何処が安全なのか全く予測が出来ない。日本では空港に武器を持った兵士は居ないが、ヨーロッパ中継空港のフランクフルトなどには、かなり前から女性兵士が自動小銃を構えて歩いていた。日本人も海外旅行などには危険を意識して行動する時代に来ている。特に高齢者は家に居ても転んで大怪我をする。悲しい事だが世界中で安全な場所などは何処にも無いと思つた方が良いかも知れない。

育つ砂

打田昇三

「塵も積もれば山となる」と言うが、砂漠地帯の砂が長い年月をかけて巨大な石（塊）になる、という話である。アフリカ大陸北部にあつて面積が三分の一を占めるサハラ砂漠は世界最大と言われモーリタニア、マリ、アルジェリア、モロッコ、チュニジア、リビア、エジプトなどの諸国に広がっている。当然だが国の位置、緯度、経度、地形などはそれぞれ違つてくるし、気候風土によつて土地の質や成分も同じでは無い筈である。

かつてローマ帝国がアフリカ大陸の地中海沿岸部を植民地化して農産物の生産に当てており、支配のための拠点とした都市遺跡が現代は沿岸諸国観光の目玉になっている。その中でチュニジアに本拠を置いたカルタゴは古代ギリシアやローマ帝

国と地中海の覇権を争つて負けたので、最初から征服された国では無い。それと関係が有るかどうかが疑問だが、此の国の砂漠の砂は風に吹かれて少しずつ固形物になり、段々と成長して大きいものは何メートルにも育つのである。材料が砂であるから力を加えれば壊れるが自然にセメントで付けたようになるから不思議である。

保存は水に漬けて置けば良く腐ることは無い。さすがに都市部には無いが、チュニジア内陸部の半砂漠地帯では、大小の石が売店に並べてある。此処は紀元前に西地中海に君臨したカルタゴ帝国の跡であるから砂漠の砂まで違ふのであろうか。

「イスラム教」とは？

菅原茂美

イスラム教過激派によるテロが相次いでいるが、本来のイスラム教とは、どんな宗教か？

約1400年前、貿易商ムハンマドは、メッカ郊外の洞窟で神の啓示を受けた。彼はその啓示を、預言者として広げ、死後聖典コーランとして保存された。それがイスラム教の始まりである。

イスラム教はコーランの教えが絶対で一神教。信じるべき「六信」で、唯一の神アッラーを奉り、經典はコーラン、来世などを信じ、「五行」で、礼拝・断食・巡礼などの義務を規定する。預言者没後、娘婿アリーを指導者とする「シーア派」と、イスラム共同体の総意で指導者を決めるべきだとする「スンニ派」に分かれるが、それぞれ王朝を築く。イスラム教徒は現在全世界で16億人（そのうち日本には10万人。キリスト教徒は2.2億人だが、出生率の高いイスラム教徒は2030年にはキリス

ト教徒数を抜くと予測されている。イスラム教は他宗教をも認める「寛容さ」があるため、支持を得、宗徒を増やした。イスラム教徒とキリスト教徒は最初同じ神を信じ、ともにエルサレムを聖地としたが、キリスト教国は中東のイスラム諸国を支配したために摩擦が起き、十字軍によるエルサレム奪還戦などもあり、紛争が絶えない。ムハンマドの風刺画などイスラム教徒には許せない事。キリスト教にはローマ法王を頂点とする宗教会議があるが、イスラム教にはそれが無い。そのためコーランの記載を勝手に解釈し、ジハード(聖戦)と称して、自分達の考えに反するものを武力で打破する。世界に呼び掛け、現在イスラム国に参戦する外国人は2万人とも言われる。それが自国に帰りテロを起こす事が危惧されている。

IIもう一言II

耳の痛い話

打田昇二

耳鼻科に行けば…と言われそうだが、是は戦国時代末期の或る武将の話である。諺にも「諫言耳に逆らう(かんげんみににさからう)」とあり忠告されたりすると喜べないのが普通であるから傲慢な武将に仕える武士は大変であつたらう。

八郷地区(片野城)に居た太田三楽斎(資正)は上杉謙信の親友と言われる歴戦の武将で、七十歳近くになつても水戸の佐竹に従い小田原攻めに出席していた。かねてから武名を聞いていた豊臣秀吉は石垣山の陣中で三楽斎に対面し、即座に自分が着用していた陣羽織を脱いで与えた。

其の時に秀吉は、酒食を供し三楽斎と雑談をし

ていたのだが小田原城攻略の手法として「此処を落とすことは天下平定に大事なので死傷者が幾ら出ても一気に攻め寄せ北条軍を根絶やしにする」と自慢げに言った。それを聞いた三楽斎は即座に「それは猪、鹿懸り(狩猟と同じ戦法)」と言われ、立派な武将は好まない戦法です」と答えた。成り上がり者で自尊心の強い秀吉は顔色を変えて黙りこんだ。他の武将なら斬られていたかも知れない。それ以後、秀吉が三楽斎の名を口にすることは無く翌、天正十九年、此の歴戦の武将は片野城で寂しく波乱の生涯を終えた。

後に関が原合戦にも同行して、徳川家康に最後まで付き添つた英勝院(お勝の方)水戸光圀の義祖母)は太田三楽斎の一族子孫である。

釣竿余談

菅原茂美

鯉釣りに夢中なA氏の話『オレの間ヨ!牛久沼で2万八千円もする竿を、ヒョイと土手に刺して釣っていたら、チョット脇見している間に、竿ごと沖に持つていかれた。2日分の稼ぎは、パーになるし、バカだっぺおれ。陸釣りなら、緋鯉などなんぼでも釣れるのにヨ!』

側で聞いていたB女史。『うちの旦那も、かなりいかれてるよ!この間大洗でイシモチを沢山釣つた…とメールが入つた。『ヨシッ今夜のおかずはイシモチの塩焼きだ。余つたら近所の人にお裾わけ』と目論んでいたら、帰ってきた旦那の手には、魚のサの字もない。手に持っているのは菓子折りだけ。旦那は久しぶりに型の良いイシモチが沢山釣れたので、水戸の友人にメールし、分けてやろう

として寄つたら、あまりにも褒められたので、全部やつてきたとの事。このお菓子は、そのお札にと用意してあつたもの…との話。

お人よし万歳。これらは平凡に暮らす、善良な市民のほのかな話。しかし、私が最近読んだ本には、「釣竿とは、片方の先には針と糸がぶら下がり、もう一方の先には、バカがぶら下がっている。」と書いてあつた。

なにッ? バカとは何だ。ふざけるな!

世の平和を知らぬガリガリ亡者かお主は? 小利口な者供は、政財界で権力闘争。それ成果主義だ。それ占有率がどうだとか、ギスギスし過ぎ。頭三角にして、まるで金の奴隷じゃないか。もつと人間らしく、のんびり穏やかに生きられねエのかよ。一步譲つて、バカになる人があつてこそ、この世が成り立つものを…。

打田兄、菅原兄の文作意欲には頭が下がる。

打田兄は常々「言葉」を文字に表現するのは人間だけ。文作が苦手、嫌いと言つた人は人間放棄する事と同じだ」と主張されているが、その主張通り、文作を實踐されている。

ライフワークとして私本平家物語を執筆されているが、既に巻十に達し、残るは巻十一、巻十二となつた。六月の九周年展には間に合わないであろうが、秋までには私本平家物語が完成するだろう。

ところが、私本平家物語が終わらぬ前に、先日、次は「将門記」を手掛けようかと思つていることのお話し。

只々敬服するのみである。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二（一―一）

- ・ 赦文（ゆるしづみ）のこと
- ・ 足摺（あしずり）のこと

東京へ遊びに行こうと一張羅の背広を着てバス停に向かつて居た若者が、盆か彼岸に甘いものを食べるぐらいにしか楽しみのない近所の婆ちゃんに呼び止められた。婆ちゃんが聞く「お洒落して何処さ行く？」若者は自慢げに「東京だよ」と答える。婆ちゃんは真顔で若者に頼んだ。「うちの孫も東京にいるから、オラは元気で居ると伝えておいてくれ」――終戦の後ぐらいにはこういう名場面が各地で見られた。余り触れたくは無いが、常磐線沿線から離れた村には「東京行き」どころか「生涯に汽車を見たことが無い」という老人が居たものである。勿論、乗ったことも無いのであろう。

現代では元氣な爺ちゃん婆ちゃんが容易に海外に出かけていて地球は狭くなっているが、平安時代の日本で異国と言えば中国か高麗（朝鮮半島）ぐらいしか無かった。特に中国大陸に興亡を繰り返した諸王朝の中で「漢」「隋（ずい）」「唐」などの大国の歴史は、良いにつけ悪いにつけ日本に伝えられており「平家物語」でも「…是は原作が中国では無いか？」と疑いたくなるような引用部分が多い。尤も、現代の様に偽ブランドであると一目で分かるようなお粗末な内容では無く飽きるくらいに丁寧に書かれているから始末が悪い。

考えて見れば平清盛は「対中国（糸貿易）」に力を入れていたと言われるので、平家物語の作者が敬意

を込めて中国の例を多用したのであろう。其の様な要素の極めて濃かった巻二を終わって、巻三では清盛の娘で高倉天皇の後宮に送り込まれた徳子が安徳天皇を生む。それに伴い栄華の絶頂を極めた平家の権力に対する弱者、特に敗者たちの怨念を思わせる出来事が展開される。特に巻第一・鹿谷事件で平家に借金を背負わされたような状態の後白河法皇が、借金は無かったこととして「目の前の敵」として清盛の前に立ち塞がろうとするのである。此のお方もしづとい。ところが、安徳天皇の誕生は皇室にとっても重要であるから後白河法皇も、憎い清盛と喜びを共有することになり、反平家活動も一時休止せざるを得ない。

巻二の終盤では鬼界が島に流されていた康頼入道こと平康頼が悲痛な願望で海に流した卒塔婆の一枚が奇跡的に安芸の宮島に流れ着き、それが都に伝わって神仏の御利益が証明された。忘れられていた「孤島の三人」に人々の関心が改めて向けられたのである。後は神でも仏でも無い勝手に権力を握っていた平清盛がどういう反応を示すのか？が、関係者はもとより都の関心事である。

ところが平家物語の作者は現代的にベストセラーを出すようなプロでは無かったようで読者の気持ちも考えず、巻三の冒頭に「赦文」というタイトルを付けてしまった。是では三人が大赦の恩恵に浴することがバレーバレーになって読まないうちから読者の興味が半減してしまう。さすがに平清盛は平家物語が書かれる数十年前に其れに気が付いて？三人のうちの二人しか釈放しなかった…。

巻第二の多くが仏教説話であり、それも現代の流通市場のようにメイドインチャイナが有った関係から物語の主人公である平清盛の出番は少なかったが、

此の巻からは主役の座に戻る。しかし、そうなる清盛によって側近を何人も処罰された後白河法皇の怒りが容易に収まらず、田舎の婆ちゃんのように東京が小さな集落であると認識し、団子を喰えば盆か彼岸だと思ふような、純朴平穩な気持ちではとても居られないのである。

赦文（ゆるしづみ）のこと

それでも鹿ヶ谷事件が発覚して関係者全員が処罰を受けた年の翌年である治承二年（一一七八）の元旦には何事も無かったように宮中の正月行事が行われ後白河法皇の御所で拝賀の儀式があつて四日には高倉天皇が法皇の所へ挨拶に来る「朝覲の行幸（ちやうさんのぎやうこう）」と言う儀式が実施されたのである。良く考えるとこの辺が不可解なところで高倉天皇は八歳で即位したけれども既に十八歳になっているから天皇として一人立ちしても良いのであるが、後白河法皇が土地の権利書などを渡さずに家長で威張っていたのである。

この様な正月行事は例年に変らなかつたのであるが、去年の夏に新大納言藤原成親以下の側近たちが平清盛に依つて処罰され取り巻き連中が居なくなつてしまつたから、法皇の御所は寂しくなると共に、平清盛に対する後白河法皇の怒りが収まらなかつた。是は当然のことである。然しながら国家の頂点に位置する天皇が年頭の挨拶に来る法皇なのであるから、済ませなければならぬ国事は山ほどあるのに本人は芸達者な秋田の「ナマハゲ」のように怒つてばかりいて何も出来ない。

一方で、太政入道（前太政大臣）平清盛のほうも巻第

二「西光被斬」で多田藏人行綱が密告して来た後は、後白河法皇のことを“油断のならない人物”だと選別して表面上は何事も無かったように対応していたが、本心では用心しており平家一門の前などで法皇の話題が出ると、清盛は不機嫌な苦笑いをしてるばかりであった。

同年正月七日の晩に彗星（ほうき星）が東の空に出現した。この星の異名を「蚩尤旗（しゅうき）」又はその別称で「赤氣（せきき）」と言った。原本には「十八日光を増す」とあるが、十日間も持つのであるうかが、望遠鏡が無かった時代は不吉な兆候として恐れられていた。平家物語は中国離れた筈なのだが此の「蚩尤旗」もアチラの話であり古代中国の神話時代に戦争が好きだった伝説上の人物の名前が「蚩尤」で、その軍旗になぞらえて彗星を蚩尤旗と呼んで忌み嫌ったらしい。

どうせ中国のことだから、と放つて置けば良いのだが丁度、その頃に平清盛の次女か三女の「徳子」が高倉天皇の後宮に送り込まれて「建礼門院」と言う名前を貰っていた。身分は「中宮」皇后格である。その女性が健康診断も受けないのに「体調不良」を訴えていたから、宮中では大騒ぎになり平家物語原本では「…先ず近辺の寺院にお経を読ませ諸神社に供物を供えた。それから医者薬を煎じて飲ませ、陰陽師が怪しいお祈りをし、密教の特別祈禱をした」と書いてあるが、葬式と間違えていて順序が逆である。

ところが、其のインチキ療法が効いたのかどうか「体調不良は懐妊のためである」と判明した。当時、高倉天皇は十八歳、中宮・徳子は二十二歳であった結婚してから七年ほど経っていたが未だ皇子も皇女

も生まれて居なかった：当たり前だと思うのだが、平家にとつては、もし皇子が誕生すれば名実ともに天皇家を把握できる訳であるから訳も無く喜び勇んで必要以上の大騒ぎとなった。無責任な第三者は「平家が繁盛している時期であるから、是は皇子が誕生するのであるう：」と噂をしていた。他人が其処まで言ってくれるのであるから、清盛を始め平家一族の者たちは無理にでも男児誕生でなければならぬ。

平家のほうは祈禱が上手と評判の（祈禱の効果で官位や地位を得たとされる）高貴な僧侶や徳が有ると言われる僧侶に命じて、あらゆる有効な祈禱やら秘法の読経を行わせ、また天体で星座占いをして災禍を払う秘法を駆使させて皇子の誕生を祈り続けたのである。六月一日には宮中の儀式に則ったのっとつた着帯が行われた。京都市内にある仁和寺（にんなじ）真言宗御室派総本山で元は宇多天皇創建の御室御所、代々の法親王が門跡として入り、門跡寺院の首位に置かれた寺院の管長である守覚法親王が宮中に参内して密教の修法「孔雀経」を読み上げ祈禱を行った。この守覚法親王は高倉天皇の異母兄である。さらに天台宗の座主（チンパーワン）である覚快法親王が参内し「変成男子の法（へんじょうなんしのほう）」を修された。覚快さんも鳥羽天皇の子である。

「変成男子の法」とは祈禱に依つて男児を産ませるといふのであるから養鶏場の管理と違つて自然の摂理に背く行為である。平家にとつては是が非でも皇子誕生でなければ都合が悪いから、あらゆる手段（と、言っても医学的ではない）を尽くして中宮・徳子が男児を生むようにお経を上げ続けていた。是も法事では無いから良い方法とは思えないが：其のうちに、身重になった中宮は俗に言う「悪阻（つわり）」が酷くなつてきた。此処でまた古代中国の話が出てくるの

だが中宮の様子は“一たび笑みを浮かべれば百の媚（こび）艶めかしき”が生じた”という漢の李夫人（前漢第七代・武帝の皇后）が居所の承陽殿で病いに伏している姿もこの様なものであるかと思われ、また其の時代から八百五、六十年も後に唐の玄宗皇帝の寵愛を一身に受けた楊貴妃の姿を詠んだ「長恨歌」にある「梨花一枝が春の雨を帯び、蓮の花が通る風に吹かれて萎み、女郎花（おみなえし）が露を重たげにする」よりも、なお劣（いたわ）しい程であった。（悪阻が酷ければ庶民でも苦しむ）

その上に「弱り目に祟り目」と言うが中宮の苦しみに付け入るようにして、ここぞとばかり手強いモノノケどもが取り付いてきた。そこで霊媒担当の童子を呼んで「妖しいヤツの正体」と言うか「祟りの雇い主」を確認することにした。童子が不動明王の助けを得て妖怪のスポンサーを暴きだしたところ、恥かしそうに出て来たのが保元の乱の崇徳天皇と其の腹心の左大臣・藤原頼長、さらに平家転覆運動で失敗した新大納言こと藤原成親と西光法師であり、そして鬼界が島に流されていた三人もついでに生き霊として顔を見せていた。何れも平家を恨んでいる連中である。

このうち崇徳天皇（上皇）は保元の乱で後白河法皇の軍勢に負けた恨みを主張して来たのだが、少し誤解があるので平清盛に頼まれた訳では無いが釈明をして置くと、清盛の両親が崇徳天皇の守役であったから保元の乱の合戦準備段階で後白河陣営は清盛に声を掛けなかった。其の時に鳥羽上皇の妃で近衛天皇を生んだ美福門院（藤原得子）が「何で清盛を呼ばないの！」と強く主張したために後白河軍に清盛が入ることになつたらしい。実は「天皇の器（うつわ）にあらず」と言われた雅仁親王を即位させ後白河天

皇としたのは此のオバサンである。美福門院は、自分が生んだ近衛天皇が早死にしたのは競争相手の皇后（待賢門院・藤原璋子）が生んだ崇徳上皇が呪祖したためだと思ひ込んでいたから怒りまくっていた。

訳の分らない怨念が渦巻く宮中には普段でも死霊、悪霊がゴキブリ程度に住み着いていたから、さすがの平清盛も娘可愛さと言うより権力基盤強化の為に中宮の男児出産を無事に実現させる方便として妥協し、霊魂たちに贈位などをする事にした。先ず保元の乱で敗れた崇徳上皇に「崇徳院」「讃岐院」の称号を贈り、同罪で悪人呼ばわりされた藤原頼長に太政大臣正一位を贈った。其の際には中務省（なかつかさしよ）と言う官位詔勅などを扱う役所の中級役人・藤原維基が勅使となつて崇徳院の墓所に行き仰々しく宣命（せんみょう）天皇の命令）を読み上げた。藤原頼長の遺体は大和国般若野に埋葬されていたのが反逆の罪で掘り返され、ご丁寧にそれが道端に捨てられていたので、今回の恩赦では捨てた遺骨が拾い集められ再び埋葬されたいから当時の朝廷・政府は実に馬鹿なことを平然と実行していたのである。

原本に「今回の贈位増官に依つて亡魂が如何に嬉しく思ったであろう」と書いてあるが、冗談では無い、誰が喜ぶか！流石に「祟りをなすから」怨霊は昔からこの様に恐ろしい」と追記してあるが、恐れるのは怨霊に対して脛に傷持つ連中なのである。過去の例でも桓武天皇の弟・早良太子が皇太子に立てられながら藤原種継暗殺の嫌疑を受けて廃され、流罪となる途中で死んでからは優れた怨霊として関係者を悩ませたので桓武天皇は慌てて「崇道天皇」という号を贈っている。

また桓武天皇の父親である光仁天皇の時代に皇后

であつた井上内親王（聖武天皇皇女）が藤原兄弟の策謀により天皇呪詛の嫌疑で皇太子・他戸（おきと）親王と共に廃された事件では、被害者の井上内親王を皇后の職位に復帰させた。是らの事は全て怨霊の怒りを鎮める為に行われたのである。

そして第六十三代・冷泉（れいせい）天皇が精神的に安定を欠いていた、と言われたり、その子の第六十五代・花山天皇が乱心気味であつたとして早く退位されたのは民部卿・藤原元方の霊に悩まされた結果である。かつて村上天皇の第一皇子である広平親王は元方の娘（祐姬）との間に生まれ即位が望まれていながら、藤原一族の力関係で藤原師輔の娘が生んだ第二皇子の冷泉天皇が即位したため元方は落胆して死んだ。二人の天皇がオカシイ人物だつた（と言われる）のは藤原元方の怨霊の祟りとされていた。

さらに冷泉天皇の第二皇子であつた第六十七代の三条天皇が重い眼病を患つていたのも同じ祟りにされているが、それだと藤原元方の怨霊が忙しすぎる。眼が悪かつたら眼科へ行けば良いのだが当時は眼科が無かつた。平家物語は「観算供奉」（かんさんぐぶ）という得体の知れない霊魂の所為にしている。余計なことを言えば、現代の皇室に冷泉天皇や花山天皇の血筋は入っていないと思われるので、宮内庁も文句は言えないであろう。

それやこれやで、平家一門は徳子中宮の出産に怨霊組合がどう対応してくるか、不安を募らせていたのであるが、それに目を付けたのは娘婿の藤原成経が島流しにあつている門脇宰相こと平教盛である。かつての朝廷が誰かを罰しては其の怨霊に悩まされた前例を引き合いに出して、話の分かる平重盛に次のような申し入れをした。

「中宮御産のお祈りを様々にされておられるが何

と言つても怨霊を鎮めるには恩赦が一番で有りそれも罪の重い者を許すのが効果的です。そういう観点からすれば、遠方に流罪とされた者を許すことが大きな善根を施すことになり功德は大きいでしょう。その為には鬼界が島に流されている者を召し返されるのが効果的ではありませんか？」

言われた重盛は早速、清盛の館に行つて叔父の言葉を伝えたのだが、少し表現を変えて清盛の弱点を突くような言葉にして次の様に申し入れた。

「叔父上は今でも娘婿の丹波少将（藤原成経）のことを嘆き、案じておられるご様子で、それが気の毒でなりません。それにつけても中宮の健康状態が優れないのを世間では藤原成親卿の死霊の祟りなどと言者が居ります。取るに足らない噂では有りますが、此処は大事をとつて大納言（成親）の霊を宥（なだ）めるためにも丹波少将を生きて召し返させては如何でしょうか；他人の思いを叶えてやれば自分の願ひも成就することになり強いてはやがて中宮に皇子が御誕生あつて平家の栄華が益々盛んになるでしょう；」

是を聞いた清盛は日頃の強気にも似ず予想外に穏やかな顔で重盛の言葉に従う様子を見せ藤原成経の赦免を承知した。そして「：さて、そうすると俊寛と康頼法師をどの様にするか？」と聞かれたので重盛は「もし、一人でも残すような事になれば中々罪業が深くなりますから、それと同じように召し返されるのが良いでしょう」と答えた。清盛は直ぐに答えずに少し間を置き「康頼のことは良いが、俊寛は私が随分と関係者に口添えをして世に出してやったのだぞ；それなのに平家に反逆したばかりで無く、自分の山荘・鹿が谷に城を築くようにして謀反の謀議を図るなど、事或るごとに平家に仇を成す振る舞

いが有った。是はどうあつても許す訳にはいかない！」と言いつつ切った。

重盛は其れ以上を言わず、屋敷に戻つて叔父の宰相を呼び寄せた。そして顔を見るより早く「少将は赦免されることに決まりました。もう御心配には及びません」と言へば宰相は思わず重盛に手を合せて喜ばれた。そして成経が船に乗せられた際に「成経の妻である娘が」どうして許して下さらなかつたのかと教盛(宰相)を見る度に涙を流していたのが思へば不憫(不便)でした」と言へば、重盛も「誠に其のお氣持ちはご尤もです。誰でも子は愛しいものです」と答えて帰られた。

やがて正式な沙汰として鬼界が島の流人たちが呼び返されることが決まり清盛が赦免状を書いたので、使者の者が都を發つて西に向かつた。宰相は余りの嬉しさに個人的な使者を同行させることになり、一行は夜を日に次いで船を急がせたのであるが何しろ海路のことで思うに任せず、波風を凌いで行く程に七月下旬に都を發つたのであつたけれども鬼界が島には九月二十日頃に着いた。

足摺(あしずり)のこと

流人の赦免を告げる迎への船は大阪湾から播磨灘へ瀬戸内海へ豊予海峡へ佐多岬と進んで鬼界が島に行つたのか、或いは紀伊水道へ室戸沖へ日向灘を抜けて行つたのか分からないが後者のルートだと途中に足摺岬がある。しかし此のタイトルはそういう事では無くて、既に平清盛が予告したように「赦免」の恩恵に浴さなかつた俊寛が悔しさと悲しさ、失望と落胆で赦免船を追いかけ浜辺で「足摺り」をして

嘆いた……ということである。

本人にしてみれば足摺りでもゴマ摺りでもして何とか孤島から出たい……この章段は極めて短いかれども人間の失望、絶望をリアルに表現しているので、当時者が平家打倒計画の中心人物であつたとしても演劇ならば観客の涙を誘う場面である。そう思うと適当な言葉は使えないので、なるべく本文に、より忠実に書くつもりである。

さて赦免を伝える使者は丹左衛門尉基康(たんざえものじょうもとやす)という者である。原本には明示して無いが源平盛衰記には平清盛の家臣としてある。その使者が船から降りても浜辺には誰も居なかつたので「都から流されて来られた丹波少将殿、平判官入道殿は居られるか！」と大声で呼びながら尋ね回つた。その時は呼ばれた二人は巻第一の「卒都婆流」で述べたように、自分たちで祀つた熊野の参詣に行つて留守だつたのである。皮肉なことに俊寛は最初から「熊野勧請」に参加してないので、浜辺近くを歩いていて使者の呼ぶ声を聞き付けた。

使者の丹基康は二人の名しか呼んで無いのだが俊寛の耳には「……都より流され給ひし……」と最後の「……おはする(何処に居ますか?)」だけしか聞こえない。頭から「迎への(赦免の)使者が来た」と思い込んで「……是は夢ではあるまいか、或いは天魔が自分を誑(たぶらか)かしているであろうか?」とても現実の事とは思えない……と意識しながらも夢に見続けていた場面であるから、慌てふためいて前のめりになりながら声のする浜辺に向かって突進して行つた。

「何事でごさるか。此処にいる私が京から流されて来た俊寛であるが……」と息せき切つて言へば使者は三人の顔も知らず赦免状の文面も知らないから汚れきつた坊さんが現れたので事務的に家臣が首に

掛けていた文書入れから赦免状を取り出して読み上げた。其処には次の様に書かれていた。

「お前たちが犯した罪は、遠方に島流しの刑を受け、是までを過ぎたことよつて赦される。速やかに都へ戻る支度を整えよ。此の度の恩赦は、中宮(准皇后)の御産安産のお祈りの為に行われる臨時のものである。是に該当する者は鬼界が島の流人、少将成経及び康頼法師の二人 赦免」

何度読んでも是だけしか書かれていない簡単なものであつた。俊寛の名は見当たらない。表紙にも封筒にも切手にも、一行が乗つて来た船の帆にも「俊寛」の文字は無いのである。其のうちに成経と康頼が浜辺に戻り読み直してみたけれども該当者は二人である。

さらに船便に託された親族の手紙が二人に配られたが、俊寛の許にはチラシ一枚も届けられなかつたから「さては自分に所縁の有る者が都には居なくなつたのか……」と思うと忍び難い悲しみが湧いてくる。「そもそも、我ら三人は同じ罪で同じ島に流された筈であるのに、赦免の時に二人が許されて一人が残されるのは、どういう訳であろうか、平家が忘れたのか、赦免状の(書記の)書き忘れでは無いのか!」と喚きながら天を仰ぎ地に伏して悲しんだのであるが、平清盛が俊寛だけは許さない!と言つた言葉を本人は知らない。

どちらの肩を持つ訳でも無いが、俊寛が嘆くように二人しか赦免しない決定は折角の大人物である平清盛を「小さな人物」にしている。許し難い罪であれば西光法師や藤原成親と共に死罪とすべきであつた——俊寛は少将成経の袂(たもと)にすがつて恨みを込めて言う。

「俊寛がこのような有り様になるのも、元はと言

え、あなた……の父親・亡き大納言殿が軽率に謀反などを企てたからである。自分が赦免されたからと言つて無関係だと思わないで欲しい。私が赦免されないのであれば都に帰ることが無理でも、せめて船に乗せて九州辺りで降ろしてほしい。

今まで三人で過ごしていたからこそ（成経の舅である平教盛が九州の領地から衣服・食糧などを送り届けてくれたからこそ）春は燕が秋は雁が訪れるように自然と故郷の事も伝え聞くことが出来た。是からは一人でもどうして便りも聞くことが出来ようか……と悶（もだ）え悲しんだ。少将成経は次のように俊寛を説得したのである。

「誠にその気持ちも良く分かります。私も召し返されることは嬉しいのですが貴方の行く末を思うと、どうして良いか見当が付きません。船に乗せて差し上げたいのは山々ですが、都の使者からお許しは得られません。許されずに三人で島を出るようなことになれば我らだけで無く、御使者にも迷惑が掛かり、都への聞こえも悪くなります。先ずは私が都へ帰り人々にも相談をして入道相国（清盛公）の御機嫌のよい折に嘆願をしてみますから、其れまでの間は今までのように辛抱をしてください。何としても命を大切にされ今回の赦免に洩れても、次のことがあると思つて下さい」

やがて船出の時刻となり、船乗りたちが大声をあげながら忙しげに準備を始めると、俊寛は船を下りたり乗つたりしながら帰りたい思いを現わしていた。成経は形見として自分が使っていた寝具（平教盛から届けられたもの）を残し、康頼入道は法華経一部を渡した。鱸綱（ともづな）が解かれ船が海岸から海に押し出されると、俊寛は綱に取り付き海水が腰から身の丈に浸るまで引かれていたが遂に背が立たなくなると、

出を待つ船に取り付いて「貴方がたは此の俊寛を見殺しになさるか！是ほどの薄情者とは思わなかった：今迄の友情も無駄になったのか只々、道理を曲げても船に乗せ給え：都がダメならば、せめて九国（九州地方）の何処かで降ろして下され……」と嘆願したのであるが、都からの使者は「それは叶わぬこと！」と冷たく言いきつてから、船べりに掛けられた俊寛の手を払い除けて船を漕ぎ出したのである。

俊寛は為す術も無く渚に戻り、其処に倒れ伏したままに幼子が乳母や母親を慕う（したう）ように手足をバタつかせながら「どうか乗せて行け！連れて帰れ！」と喚き（わめき）叫んだけれども、

船乗りたちに漕がれた船は白い波だけを微かに残して行くばかりであった。浜辺からは船が見えるけれども、俊寛の目には涙が溜まって見え無い。そこで近くの高台まで走つて無駄とは分かっていたながら船を呼び戻す動作を繰り返していた。昔、継体天皇の擁立に貢献した大伴金村の息子である狭手彦（さでひこ）が遣唐使として肥前松浦瀨から船出する際に、妻の松浦さよ姫が別れを惜しんで湊の見える岡に登り領巾（ひれ）女子用マフラーを振った、とする古事が伝わるけれども俊寛の悲しみは、それに増しているであろう。

俊寛は絶望の余り其の夜は仮の寝場所へも戻らず波に足を浸し、夜露と潮風に身体を晒して一夜を過ごした。それでも少将は情け深い人であるから自分の為に良いように嘆願してくれるであろうと僅かな望みに賭けていたのであり、その心中は誠に哀れである。其の昔、インドに伝わる話で、継母が夫の不在中に二人の継子を南海の孤島に捨てさせた、と言うが、其の際の子供たちの悲しい心情が思い出される俊寛の身の上である。（続く）

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな
雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自
分の風を「ふるさとの風景」に唄つ
てみませんか。オカリナの製作・オカリ
ナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待
ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

《ふるさとの》

アレンジ書架・書架を席料理のお店です。

看板娘（大）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

0299-55-0000

※0299-55-0000で予約受付です。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会9周年記念展

ギター文化館 2015年6月20日・21日(10:00~14:30)

ふるさとルネサンス講座受講生4名と講師が中心となって、会報「ふるさと風」を発行し5月で満9年となりました。兄妹会の劇団ことば座の第28回定期公演にあわせて「ふるさと風の会歩み展」を開催いたします。会員の書きためてきた小文を集めた文庫をはじめ、風の会の分科会として兼平智恵子が指導する「風のことは絵教室」の作品展示、伊東由美子が代表を務める玉里御留川学習会の発表展を開催します。皆様のお越しをお待ちいたしております。※ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三(0299-22-4400)兼平智恵子(0299-26-7178)伊東由美子(0299-26-1659)まで。

「ふるさと風の会」<http://www.furusato-kaze.com/>

※ふるさと風の会9周年展は入場無料です。

ことば座第28回定期公演

ギター文化館 2015年6月20日・21日(14:30開場、15:00開演)

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第三十五話

朗読舞劇 **緋桜怨節** (2015)

ことば座の定期公演も、今回で28回となり、ギター文化館発「常世の国の恋物語百」も第35話となりました。言語学的には確立されていませんが、元々「聾語」と呼ぶべき言語がありました。小林幸枝の手話舞は、当に聾語と手話が綾なす心の声を観る舞といえます。スケールアップした小林の手話舞を堪能していただけるように緋桜怨節2015版として手話舞を加筆した朗読舞劇をお楽しみください。

脚本・演出 白井啓治 / 朗読 しらみひろぢ / 手話朗読&手話舞 小林幸枝

詩の朗読

昨年に続き、札幌つむぎ人の熊谷敬子さんをお迎えし、詩の朗読をおとどけします。

白井啓治作：里の恋歌二編 朗読 熊谷敬子 しらみひろぢ

木田澄子作：それから崩れる春を抱いて 朗読 熊谷敬子

入場料金：2,000円(小中学生1,000円)
ギター文化館(0299-46-2457)にて発売

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 080-3125-1307(白井) Fax 0299-23-0150